

儀礼 カムイトウラノ - 神々とともに



イオマンテのときのヌササン(幣棚)。クマ神への土産、料理などが並んでいる。(平成6年に財団法人アイヌ民族博物館が行ったイオマンテより。同博物館蔵)

日々の生活を神々とともに営んでいたアイヌは、事あることに神に祈った。アイヌ語でカムイノミという。それは、一人炉辺に座してのカムイノミから、家族、あるいは集落を単位とした集団でのカムイノミなど多様であった。集団でのカムイノミの多くはある一定の形式をもった儀礼として執り行われ、長老が祭主となって主導し、男性が中心となった。そうした儀礼のひとつに、「送り儀礼」がある。この「送り儀礼」は、採集狩猟民としてのアイヌの観念を如実に示しているものであり、今を生きる私たちも学ぶところを多とする。以下、「送り儀礼」のうち、「動物神の霊送り」、「先祖供養」について略述する。

神々

アイヌは、自分たちの周囲にあるすべてのものは神々が支配しているもの、あるいは神々が化身して存在しているものと考え、常に尊崇の念をもつて接した。すなわち、太陽、月、風、川、水といった自然、クマ、キツネ、ウサギ、シマフクロウといった動物、木や草といった植物、鍋や舟、杵や臼といった用具類など、アイヌの生活に役立つもの、あるいは天然痘といった流行病など、アイヌの力の及ばないものは神であり、それぞれ役目をもって、アイヌの住む世界に存在すると考えたのである。

これらの神々のなかにあつて、特に、動物神は、食糧となる肉や衣服などの材料となる毛皮をもたらし、くれる神として、最も重要かつ身近な存在であり、この動物神に対する儀礼は、アイヌの日々の生活のなかで重要な位置にある。

神々を迎える

神々は、その住まう世界において、普段はアイヌと同様の姿をして、アイヌと同様の生活を営んでいるのであるが、ある種の義務をもってアイヌの住む世界を訪れる。その際、神々はアイヌの住む世界に滞在するための姿形に扮装・化身する。たとえば、山の神であれば、毛皮と爪をつけてクマの姿となり、肉や毛皮を土産として、アイヌの住む世界を訪れるのである。また、舟の神であれば、舟の衣服を身にまとい、舟の姿となって、アイヌの住む世界を訪れ、舟としてアイヌのために役立つのである。

アイヌは、こうしてアイヌの住む世界を訪れた神を賓客として丁寧に迎えるわけであるが、これを現実にとらえてみると、アイヌが狩猟でクマを射止め、肉や毛皮を得るといふことであり、舟をつくる……つくりあげる、といふことである。

霊を送る

アイヌは、これらアイヌの住む世界を訪れた神々を長く滞在させておくのではなく、ある時期がくると、盛大な儀礼を執り行つて、神々の住む世界に送り帰す。これが、「霊送り」であり、特に、動物神の霊送りは、クマの霊送りをもち、古くから「クマ祭り」「クマ送り」としてよく知られているが、他に、シマフクロウやキツネ、タヌキなども霊送り儀礼の対象となる。さらに、物神、植物神に対しても霊送り儀礼が執り行われる。

クマの霊送り

動物神の霊送りの一例として、クマの霊送りを



イナウ（木幣）、カムイノミの際に用いられるもので、人間の祈り言葉を神に伝える、神の身代となる、神への土産になる、など多様な性格を持っている。（旭川市博物館蔵）



イクバスイとトゥキ（杯）、カムイノミの際に用いられるもので、イクバスイは人間の祈り言葉を神に伝えたり、トゥキに注がれた酒を神に届ける役目を持っている。（旭川市博物館蔵）

みてみよう。クマの霊送りには、山野で射止めたクマをその場で送る、射止めたクマを集落に持ち帰り、集落で送る、親グマはその場で送り、生け捕った仔グマを集落に連れて帰り、一年ないし二年養育してから送る、という三形式があり、の形式がイオマンテといわれるものである。

イオマンテは、アイヌの住む世界に滞在したクマ神（山の神・仔グマ）を親神（親グマ）の待つ神々の住む世界に送り帰す儀礼であるが、そこでは、花矢で遊ばせる、踊りを見せる、物語を聞かせるなどしてクマ神を楽しませ、さらに、お土産として、干した鮭や酒、団子、木幣などを持たせて、アイヌの住む世界がいかにかいところであるかを印象づけるわけである。

神々の住む世界に帰ったクマ神は、仲間の神々を大勢集め、土産を分け与えて、アイヌの住む世界は素晴らしいところであり、自分はまた来年もアイヌの住む世界にいくつもりであることを話して聞かせるのである。そうすると、仲間の神々は自分もその恩恵にあやかろうとして、翌年、アイヌの住む世界を訪れることになるのである。すなわち、クマ神が数多アイヌの住む世界を訪れるということになるのであるが、これを現実にとらえてみると、

狩猟で獲物（クマ）をたくさん得ることができるということになる。

このように、アイヌは、神々を神々の住む世界に送ることにより、それらの神々が再びアイヌの住む世界に訪れることを願う。すなわち、現実の世界にあつては、食糧の恒常的な獲得を求めたのである。

先祖供養

次に、同じ人間との関わりで行われる送り儀礼に先祖供養がある。アイヌは、人間は死ぬと霊となってポクナシツという死後の世界にいき、そこで現世と同様の姿形となって、現世と同様の生活をすると考えた。そこで、年に数回、さらには動物神の霊送りなど、大きな儀礼の実施には必ず付随して、死後の世界で生活している人たち（縁者）を偲ぶとともに、彼らに酒や食べ物などを送る儀礼を行った。シンヌラツパ、イチャルパなどと呼ばれる儀礼で、日本語では先祖供養などといわれる。儀礼は、墓地ではなく、家の側につくられた専用のヌササン（幣柵）で行われるが、大きな特色は、酒や食べ物だけを供物として供える（送る）のではなく、その場にいる現世の人間もまた供物を食べ、ともに楽しむということである。

アイヌの曰々は神々との「共生」にあつたが、故人との「共生」もまた常としたのである。ちなみに、この儀礼は他の儀礼と違って、女性が主役となつて行われる。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

秋野 茂樹



先祖供養。（平成6年に財団法人アイヌ民族博物館が行ったイオマンテの際の先祖供養より。同博物館蔵）



イオマンテで、クマ神を遊ばせている。（平成6年に財団法人アイヌ民族博物館が行ったイオマンテより。同博物館蔵）